「ククク、ちゃんと連れてきたな。戻れ」
「はーい」
　ＣＯＭＰの中にピクシーが吸いこまれていく。
　石段を登りナオヤの斜め上に腰掛けた。すぐ隣に座りたくないというのは些細な抵抗に過ぎない。夕方からの鬱憤をそのままぶつけるような真似はしたくないと思ったが、どうにもすっきりしなかった。
「ナオヤ、最悪」
「ククク……そんな憎まれ口を叩きに来たのか？」
「呼んだのはそっちだろ」
「お前がすぐ近くにいる気配があったからな。あんな男を訪ねる程暇なら招待してやろうと思った」
（ジンさんを巻きこんだのはナオヤじゃないか……）
　納得出来ない理由だが、本当にそんな気まぐれだとしたら夕方に会った時のような危険は無いだろう。昼間は訊けなかった話が出来るかもしれない。
　ずっと完璧だと思っていた従兄は、全然完璧な人間なんかじゃなかった。封鎖の中でそう確信したけれど、それでもナオヤがたった一人の従兄である事実には変わりなかった。
　今の夕夜では何を言っても冷静になれないだろう。けれどそれではナオヤとはいつまでもちゃんと対等に話せないままだ。
（落ちつけ、落ちついてナオヤが何を考えてるのか訊かなきゃダメだ）
「ナオヤ、ちゃんとご飯食べてるの？」
「それなりにな。お前達より食糧事情は良いはずだ」
　そうだろう。何事も周到な従兄の事だから、封鎖が起こると知っていれば当座の生活環境くらい確保しているはずだ。
「おやつ食べる？　水羊羹と蜜豆、どっちがいい？」
「水羊羹」
　即答した従兄に夕夜は持ってきた水羊羹の缶を渡す。自分は蜜豆のパックを開けた。
「ぬるいな」
「冷蔵庫、使えないからね」
　生温いせいか余計に甘く感じる寒天を口に入れる。お茶が欲しくなってペットボトルも出した。飲みかけのそれに、ナオヤも当然のように口をつける。
「こんな物をどこで手に入れた？」
　面白そうに問いかけてくる。既に封鎖内の大抵の食品を扱う店は商品を全て放出するか、そうでなければ

略奪されていた。配給以外の食品を手に入れているのが不思議だったのだろう。
「地下鉄の中の売店。誰もいなかったから」
「成程。では政府の人間と接触したんだな」
「特殊部隊の人に会ったよ。ＣＯＭＰ制作者の事も調べてた。封鎖が解けたら指名手配されちゃうんじゃないの？　どうするつもり？」
「まさか。政府が悪魔の存在を認めるはずがない。指名手配などせずに俺の存在ごと闇に葬ろうとするだろうよ」
（やっぱり、そうなるだろうって気づいてたんだな……）
　ナオヤは困った様子も見せず、涼しい顔で水羊羹を口に運ぶ。
「じゃあこれが人生最後の甘味かもしれないよね。……それ、一口ちょうだい」
　口を開けると、無言でプラスチックのスプーンが差しだされた。
　生ぬるい甘味が喉を滑り落ちていく。疲れの溜まった体に甘い菓子は心地良い。
「ん、……ぬるいね」
「そっちも寄越せ」
「はい」
　何を欲しいのか判らなかったからスプーンを突っこんだカップをそのまま手渡そうとした。ナオヤはその手ごと掴んで糖蜜を啜った後、橙色の寒天だけを選り分けて掬う。
「これもぬるいな」
「しょうがないよ。冷蔵庫までは持ってこれないからね。……あのさあナオヤ。オレ、かき氷が食べたい」
「そんなものあるか」
「だから封鎖が解けたらだよ。ナオヤとかき氷食べて、ちゃんと冷やした蜜豆と水羊羹食べたいんだ」
　去年の夏はナオヤの古いアパートに、毎年家で使っていたかき氷器を持ちこんで一緒に食べた。今年はアツロウも連れて三人で、同じ事をするつもりだった。
　ナオヤと一緒に日常に戻りたい。けれどこのままではどんな道を選んでも今までと同じ日々は戻ってこないんじゃないだろうか。
「お前の望みとはそんなものなのか？　魔王になればかき氷など食べ放題だぞ。いや、お前が本当に望めばこの世界ごと何でも手に入るだろう」